

# 養護教諭を目指す大学生の特別支援教育に関する学びの意識

—Hayashi's Quantification Methods Type III, Text Mining (KH Coder) による探索的検討を通して—

石 山 貴 章

Consciousness of Learning about Student of Course of School Nursing Teacher's  
“Special Support Education”

—Exploratory Research for Analysis of Questionnaire and Written Description Based  
on Hayashi's Quantification Methods Type III and Text Mining (KH Coder)—

Takaaki ISHIYAMA

## 要 旨

大学教育機関において、将来、養護教諭を目指している学生79名に対し、特別支援教育に関する意識調査を実施した。今回は、質問紙調査における意識基本調査と自由記述文を中心に取り上げながら、多次元データ分析法である Hayashi's quantification methods type III (Excel statistics, 2015) 及び Text Mining (KH Coder) を援用して分析を試みた。学生たちは、看護教育や保健教育という専門領域を学ぶ中において、特別支援教育の必要性を強く認識しており、学びの機会や専門性を求めていることが明らかとなった。本結果を活かしていくためにも、大学教育機関としての学生のニーズに即した学びの場を提供していくとともに、カリキュラムや講義内容を検討していかななくてはならない。今後も、大学教育現場において、養護教諭を目指す学生に対する特別支援教育への専門性や実践力が求められていることを十分に認識した上での学修のあり方や学びの機会について検討していきたいと考える。

キーワード 大学生 養護教諭 特別支援教育 専門性 意識調査 数量化理論第Ⅲ類 テキストマイニング (KH Coder)

Key Words : University students Student of course of school nursing teacher Special support education Specialization Consciousness Hayashi's quantification methods type III Text mining (KH Coder)

## Summary

In recent days, role of the school nurse teacher's special support education is desired. Student of course of school nursing teacher needing special needs education in university classes have increased. However, since such introductions began recently, the system and methods of using such lecture have not been sufficiently investigated. In order to improve situation, we should have to need to conduct investigations of the consciousness of learning about student of course of school nursing teacher's "Special Support Education".

The present study was designed to investigate the support, special knowledge and effective approach for student of course of school nursing teacher who need special support education in university, and the 79 answers from student of course of school nursing teacher (a recovery: 100.0%) were obtained.

This study has made a Hayashi's quantification methods type III (Excel statistics, 2015) of the questionnaire 2item and text mining (KH Coder) of the questionnaire item in the free descriptive answer text. The procedures are as follows;

1) The document is subjected to a morphological analysis, words are extracted and a word under consideration is selected on the basis of the number of frequencies. 2) co-occurrence network analysis. 3) cluster analysis. As a result, the following 9 categories were extracted "life/relief" "care/health/info" "coordinates" "promotion of understanding" "support" "specialization" "support method" environmental adjustment" "notice/accept". In addition, by implementing a text mining in order to deep insight attitude structures on an individual basis, it has become feasible to bring to the surface the part where their feelings lying behind thought of them. Thus, I recommend that future directions that university program must provide for learning and opportunity of the special support education.

## 1 問題と目的

全国養護教諭連絡協議会（2014）における養護教諭の職務に関する調査報告書による「発達障害」関連の調査結果のうち、「健康相談の内容」の「発達障害」では、幼稚園から高等学校に上がるにつれて、その割合は増加しており、特に中学校では、38.7%、高等学校では、51.6%となっている。

また、特別な支援を必要とした児童生徒等への対応では、どの校種においても養護教諭は「支援チームとしてのかかわり」が84%～91%と高く、関わり方には校種により多少の差はあるものの、「早期発見と情報の提供」「日常の観察と記録」「問題行動（パニック等）を起こした時の対応」「担任や教職員からの相談への対応」といったかかわりが上位を占めていた。このように、近年、特別支援教育については、養護教諭の専門性が大きく求められるようになってきていることが報告されている。

関根・大庭ら（2015）は、特別支援教育における養護教諭の位置づけに関する現状と諸課題を明らかにしていくため、「養護教諭」に視点を当てた研究を概観した。その結果、特別支援教育と深い関わりがある「学校保健」を中心とした対応スキルや大学機関での養成段階において、特別支援教育の学びの充実が必要であることを明らかにしている。

本田・松葉・酒見・米村ら（2005）は、特別支援教育を必要とする児童の実態と支援に関する事例研究を行い、その中で、事例の傾向に応じた支援と養護教諭の役割について学級担任及び養護教諭に対して質

問紙調査と半構成的インタビューを実施している。その結果、効果的なアプローチとして、「個別指導」「学級経営」「校内支援体制」「保護者・外部支援機関との連携」「養護教諭の支援と認識」という重視されるべき観点を明らかにした。特に、養護教諭の認識については、各学級担任との意識の相違が想定されており、子どもを中心に置いた支援や実践の確認作業が必要となろう。

また、林・石橋・小杉・今林・林ら（2013）は、養護教諭が認識する特別支援教育の役割について学校種間で検討を行いながら、「児童・生徒へのカウンセリング」や「教職員や保護者への助言」、「コンサルテーション」、「外部機関との連絡調整」等、さまざまな役割を担っていることを明らかにした。学校種間ではもとより、特別支援教育に関する認識の高さと実際の学校現場におけるニーズの様相等によって、養護教諭の役割認識も違ったものになってくることが想定されよう。

大学教育現場においても、養護教諭養成と特別支援教育との関連を重要視しながら実践が展開されているが、カリキュラムや教育課程などの問題があり、なかなか容易には専門性を修得できない状況がある。養護教諭養成と特別支援教育をリンクさせた研究については、まだ数少ないものの、養護教諭養成における特別支援教育の意義は高まっている。都築・大島・山田・名倉・原・山下ら（2015）は、インクルーシブ教育システム構築における養護教諭養成の観点から検討を加えている。ここでは、特別なニーズがある子どもが安心して教育を受けられるような学校保健管理について言及されており、インクルーシブ教育システム下での養護教諭の修得すべき能力として、1) 身体の発育発達に関する知識、2) 子どもの様子を観察し、その状態に合った助言と課題の提供を挙げている。

一方、養護教諭を目指す大学生に焦点をあてた研究として、橋弥・竹下・平井・梶村ら（2015）は、養護教諭養成課程における臨床実習の感想文の内容を質的に分析し、「養護教諭という視点と自覚が養われる」「生命、健康を守るためのチームワークと知識・技術の必要性」「実習前の準備と実習に臨む姿勢の大切さ」「実習を支えてくれた人への感謝」という4つのカテゴリーを浮上させ、講義内容や実習事前事後指導のあり方について課題を挙げている。

竹鼻・朝倉・渡邊・佐見・五十嵐・塚越・丸太・五十嵐・遠藤・大関・小熊・小野・酒井・佐藤・高橋・中谷ら（2010）も、養護実習における学生と養護教諭の学びに関して自由記述調査の内容を質的に検討し、学生自身の学びとして、「考え方の広がり」「養護実践への活用」「子どもへの対応の変化」や「記録物からの学び」「自分に不足している学習事項」などを挙げている。

また、養護教諭から見た学生の学びについても、「子ども理解の深まり」「養護教諭像の具体化」「記録の深まり」「対応のふりかえり」などをコード化によって浮上させている。ここでは、特別支援教育について触れられてはいないものの、大学における看護教育の課題を明らかにしていくため、養護実習や臨床実習場面の記録や調査文を取り上げて分析し、その結果を大学教育にフィードバックしていくプロセスの重要性を示していると考えられよう。

養護教諭を目指している学生は、特別支援教育に関する意識は高く持っており、学ぶ意欲や姿勢は大学教育現場においても、大いに認識されているところである。学生たちも、特別支援教育の必要性は十分に感じており、養護関連の科目と重ならない講義時間を有効に活用して特別支援教育に関する専門性を高めようとしている。大学教育機関も、より多く、特別支援教育の専門性を学ぶ機会を設けていくために、カリキュラムや教育課程、時間割の編成や調整等に力を入れており、専門領域や演習等に、特別支援教育を意識した内容が盛り込まれるようになってきている。

よって、本研究では、将来、養護教諭を志望している学生が意識している特別支援教育に関する専門性や学び、課題などについて意識調査を実施し、学生自身が抱える問題意識の基本的な構造を探索的に明らかにしていくとともに、本研究で得られた知見を学びの場に還元していくことを目的とした。

## 2. 「養護教諭」実践意識調査

### 1) 方法と対象

将来、養護教諭を目指している大学4年生の計79名に対して「特別支援教育」に関する質問紙調査を行った。回収率は100%（調査実施日：2014. 11. 20及び2015. 11. 24）の計2回である。

### 2) 手続き

調査の手続きは、2014及び2015年度「教職実践演習」講義の特別授業（特別支援教育領域）で筆者が実施した講義（90分）の中で調査票を配布、回収する集合調査を実施した。調査項目は、2010年度全国養護教諭連絡協議会による養護教諭に関する調査報告書、白石・水野(2012)、本田・松葉・酒見・米村(2005)、小林・竹下(2009)、林・石橋・小杉・今林・林(2013)を参照としながら作成した。

### 3) 分析方法

本調査結果は、数量化第Ⅲ類及び計量テキスト分析を用いて分析を試みた。数量化理論第Ⅲ類（以下、数量化Ⅲ類）では、変数相互の関連性を明らかにすることによって、いくつかの新しいファクターを見出し、そのファクターをものさしとして、カテゴリーあるいはデータの類似性やポジショニングを明らかにする手法である。今回は、質問紙調査で得られたデータをダミー変数化（0,1）し、多数の質問項目のカテゴリーデータに潜む潜在変数を探り出し、その潜在変数を用いて元のデータを説明することを目的として結果の視覚化を図った（Excel Statistics, 2015）。また、計量テキスト分析（KH Coder, Ver. 2. Beta. 30 e）では、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析（content analysis）を行う方法」（樋口、2014）として位置づけながら、分析方法の信頼性・妥当性に留意しつつ、単なるデータの記述ではなく推論を含むと言った、内容分析の考え方を受け継ぎながら分析を行った。

また、この定義では、量的方法を用いることも示されており、量的方法と質的方法とを循環的に用いた結果として、量的分析の結果はデータの「整理」とどめ、質的分析・記述について報告を行った。計量テキスト分析の方法としての特長は、量的分析と質的分析の組み合わせという点にあり、本研究では、主に自由記述文（79名より計102件の記述）に対しての解釈に対して、この計量テキスト分析を援用することとした。なお、計量テキスト分析（自由記述文分析）の手続きとしては、自由記述文に記載された言語データについて、KH Coderを援用しながら、テキストマイニングを行い、データの解釈を試みることにしている。頻出語：自由記述文で多く出現していた語を抽出共起ネットワーク：出現パターンの似通った語、すなわち共起（出現）の程度が強い語を線（edge）で結んだネットワーク図を描くクラスター分析：語と語の関連を探索（クラスター化）し、結果を視覚化することで、より深い分析と考察を試みる。

## 3. 結果と考察

### 1. 養護教諭として学びたい特別支援教育に関する内容（勉強会 研修会 講演会など）

学生たちが学びたいと考えている「特別支援教育」に関する内容については、「障害に関する知識・技能」がもっとも多く、次いで、一人ひとりの子どもたちの実態に即応した「個別支援のあり方」、「具体的支援」「学校支援」「保護者支援」等であった。また、各関係機関や専門家との「連携」、「担任・教職員への支援」「コーディネーターとしての役割」等の重みづけが高くなされていた。

大学においては、カウンセリングや心理・発達に関連する講義内容もあるが、これらの学びについても、必要性を感じている学生はおり、実践の理論的根拠を追究し、自身の実践と理論の結びつき等を意識していくことの重要性をもっていることが推測される。

一方、特別支援学校現場の具体的な取り組みや実践等についての情報が十分に提供できていないことも想定され、「特別支援学校では、一体どのような取り組みがなされているのかを知りたい」「養護教諭は特別支援学校でどのような実践を行っているのか」等、学生自身がイメージできる情報や実践報告を提示していくことも求められている。

また、数量化Ⅲ類による解析の結果、得られた各軸の固有値は、.39、.36、.33、.31、であり、変数間の相関係数が.60以上の軸を基準にし、解釈可能性も考慮して、第2軸までを採用した。その後、第1軸

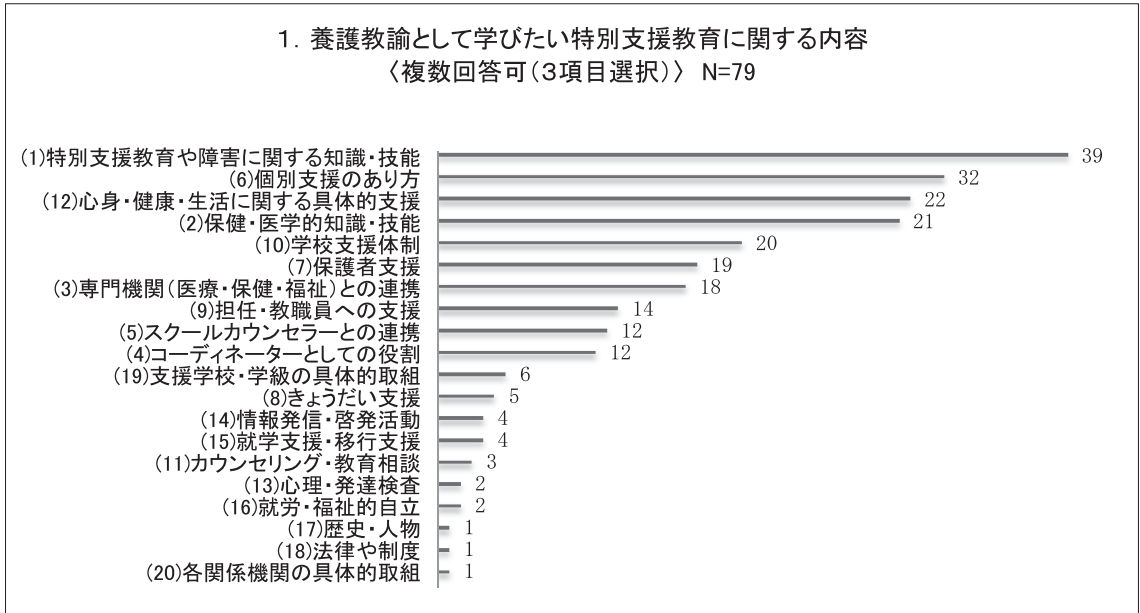


Fig. 1. 養護教諭として学びたい特別支援教育に関する内容

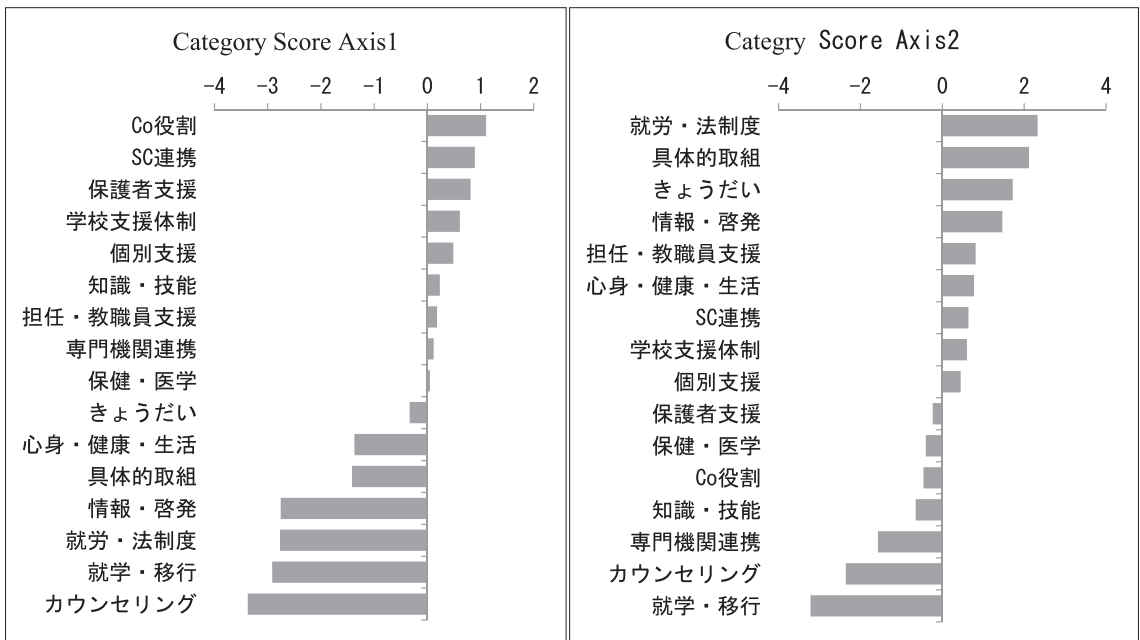


Fig. 2. 養護教諭として学びたい特別支援教育に関する内容 (category score Axis1, 2)

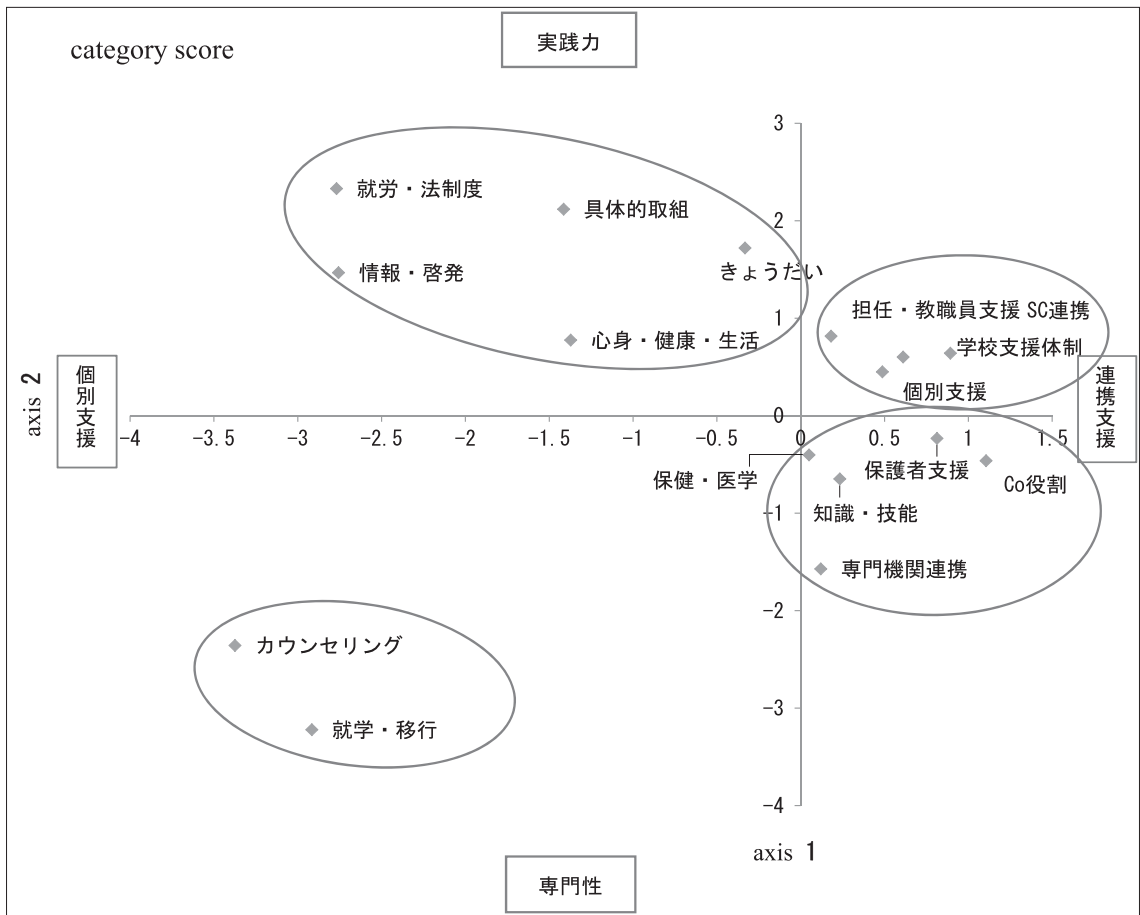


Fig. 3. 養護教諭として学びたい特別支援教育に関する内容 (quantification methods type III)

と第2軸のカテゴリー数を算出し、2次元平面上にプロットした。

学生たちが選択した項目の類似性傾向について category score のポジショニングで確認すると、第1象限は、“就労・法制度の理解”、“情報・啓発”、“具体的取組”、“心身・健康・生活”、“きょうだい”が付置されており、第2象限では、“担任・教職員支援”、“SCとの連携”、“学校支援体制の構築”、“個別支援”、第3象限では、“カウンセリング”、“就学・移行”、第4象限では、“保健・医学”、“知識・技能”、“専門機関連携”、“保護者支援”、“Co役割”が付置されており、axis 1の軸名を「実践力」－「専門力」、axis 2の軸名を「個別支援」－「連携支援」と命名した。

## 2. 特別支援教育と関わっていく上での問題意識・課題意識

大学生の特別支援教育に関する問題意識や課題意識については、「児童生徒とのコミュニケーション方法」「児童生徒の問題行動への対応」「専門的知識・技能」「メンタルヘルス」「実態把握」等が上位を占めた。次いで、「教職員との共通理解」「児童生徒の生活管理・安全管理」が挙げられていた。やはり、大学生にとっては、学校生活場面の具体的な支援のあり方や問題行動への対応方法など、即時対応しなくてはならない場面を想定した上での実践力をつけていきたいという思いが強いと想定される。

さらに、数量化Ⅲ類による解析の結果、得られた各軸の固有値は、.53、.49、.43、.41、であり、変数間の相関係数が.70以上の軸を基準にし、解釈可能性も考慮して、第2軸までを採用した。その後、第1

軸と第2軸のカテゴリー数を算出し、2次元平面上にプロットした。

学生たちが選択した項目の類似性傾向について category score のポジショニングで確認すると、第1象限は、“関係調整”、“共通理解”、“専門的知識・技能”、“問題行動”、“コミュニケーション”、第2象限は、

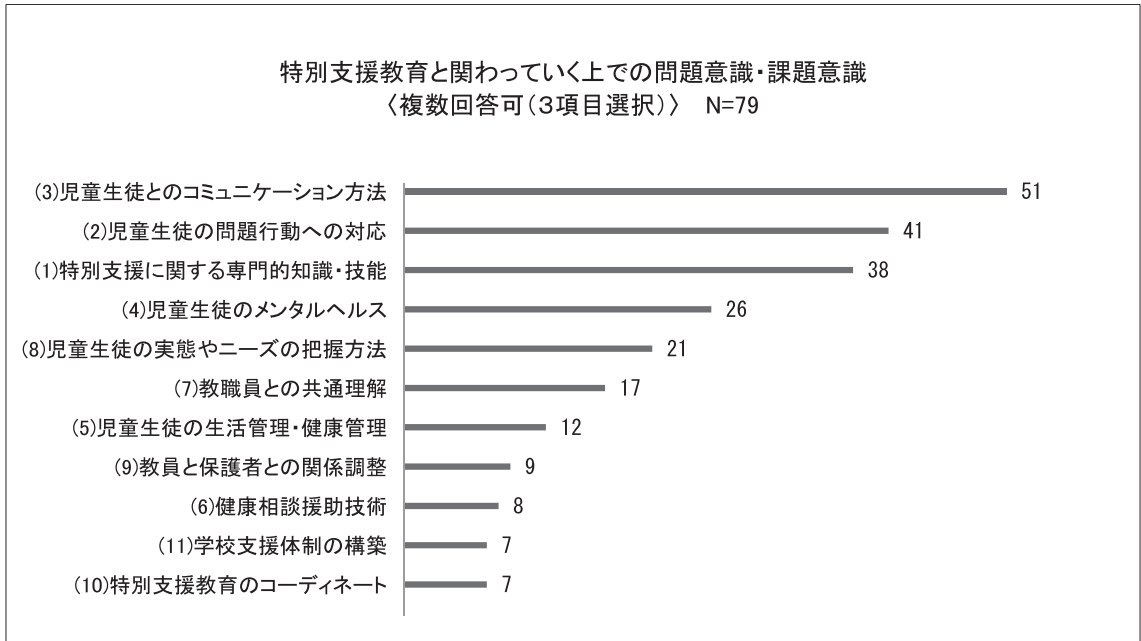


Fig. 4. 特別支援教育と関わっていく上での問題意識・課題意識

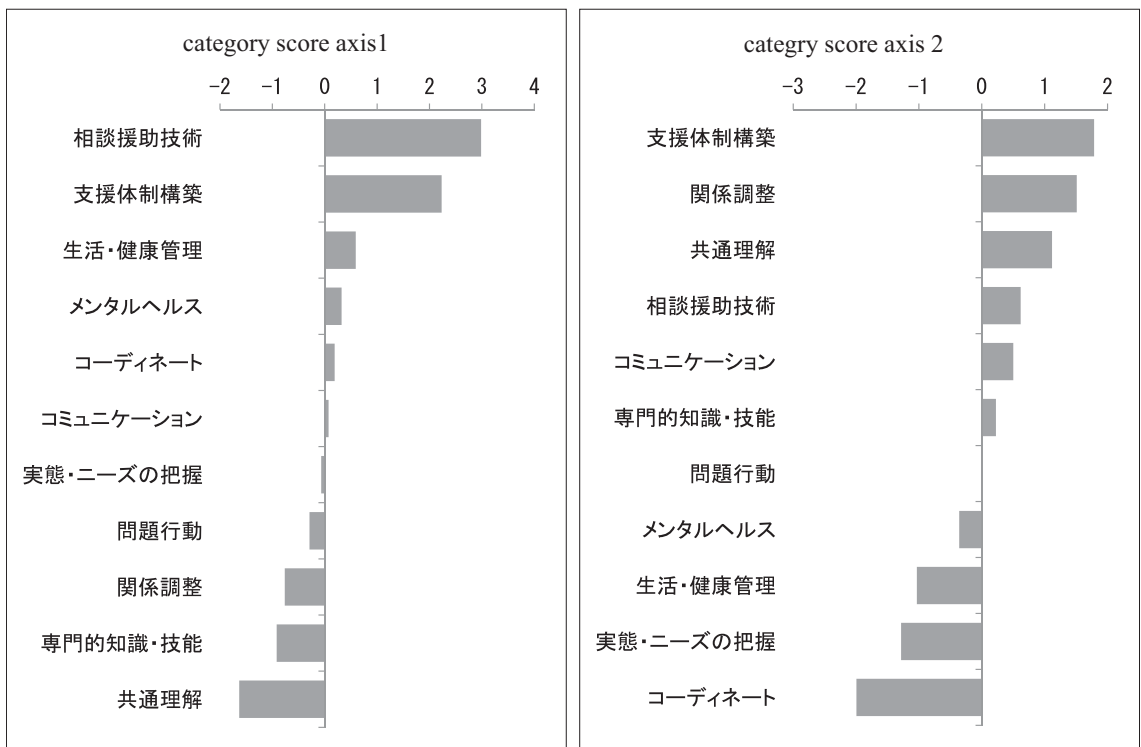


Fig. 5. 特別支援教育と関わっていく上での問題意識・課題意識 (category score axis1, 2)

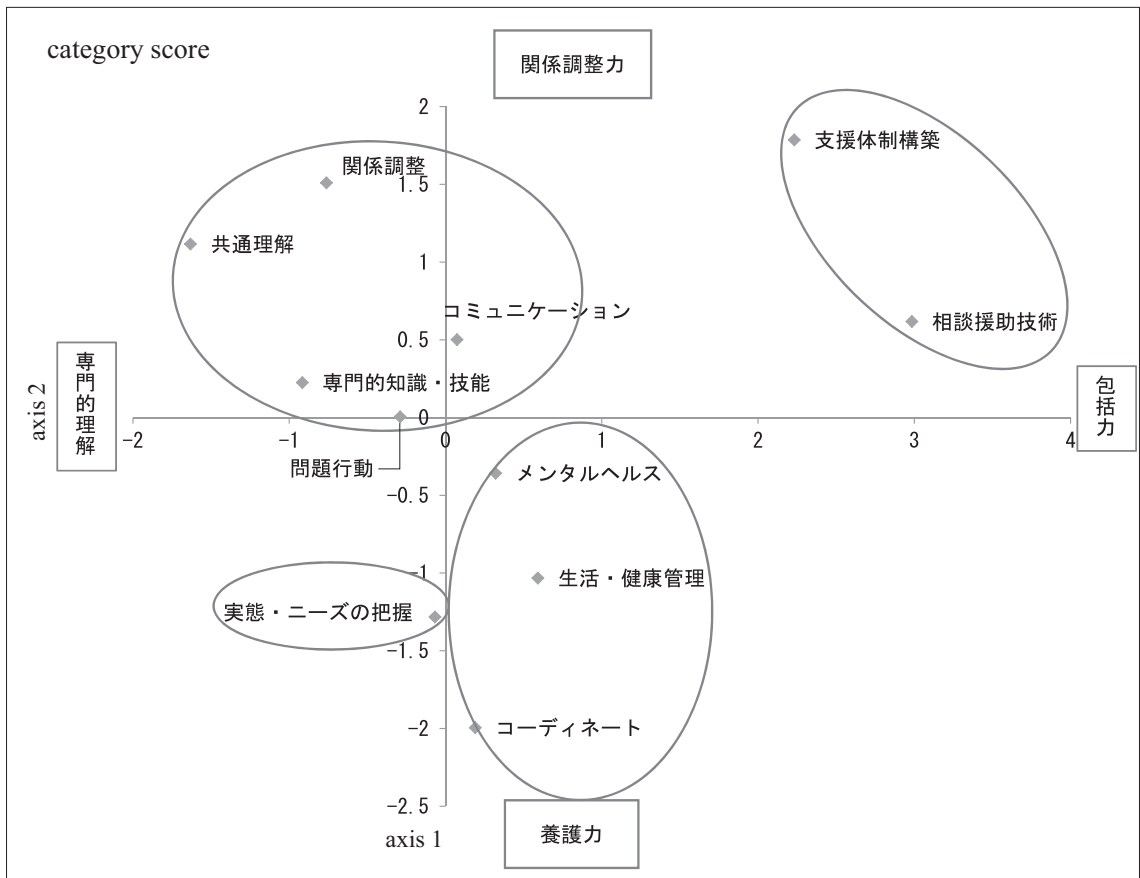


Fig. 6. 特別支援教育と関わっていく上での問題意識・課題意識 (quantification methods type Ⅲ)

“支援体制構築”、“相談援助技術”、第3象限は、“実態・ニーズの把握”、第4象限は、“メンタルヘルス”、“生活・健康管理”、“実態・ニーズの把握”、“コーディネート”が付置されており、axis 1の軸名を「関係調整力」－「養護力」、axis 2の軸名を、「専門的理解」－「包括力」と命名した。

### 3. 「養護教諭」に必要とされる（求められている）、「特別支援教育」に対する役割とは（自由記述文）

#### 1) 計量テキスト分析結果（KH Coder）

ここでは、計量テキスト分析を用いて、自由記述文を探索し、内容をより深く分析することを試みた。本論では、①頻出語リスト（テキスト文で頻繁に使用された語のリスト作成）、②共起ネットワーク（出現の似通った語、共起の程度が強い語同士を線で結ぶ）、③クラスター分析（似通った語を含む文書グループのカテゴリー化）を行い、ここで得られた結果から、データの中の主題やKey Wordsなどを抽出し、結果解釈及び考察に援用することとした。

##### (1) 頻出語について

頻出語（Fig. 1）については、特徴づけ用語としての「支援」「特別」「学校」「連携」「関係機関」「理解」「必要」「配慮」「専門性」等が頻出度が高く、一方、「気づき」「関係」「ニーズ」「安心」「目線」「ケア」「調整」等の出現率は低かった。上位に頻出しているものは、専門性や関係性、連携等の「調整」「コーディネート」に関連したものが多く、特別支援教育現場で求められている養護教諭の役割として、調整役やつなぎ役が意識されている。トータル的に特別支援教育で重要視されているKey Wordsは十分に含ま



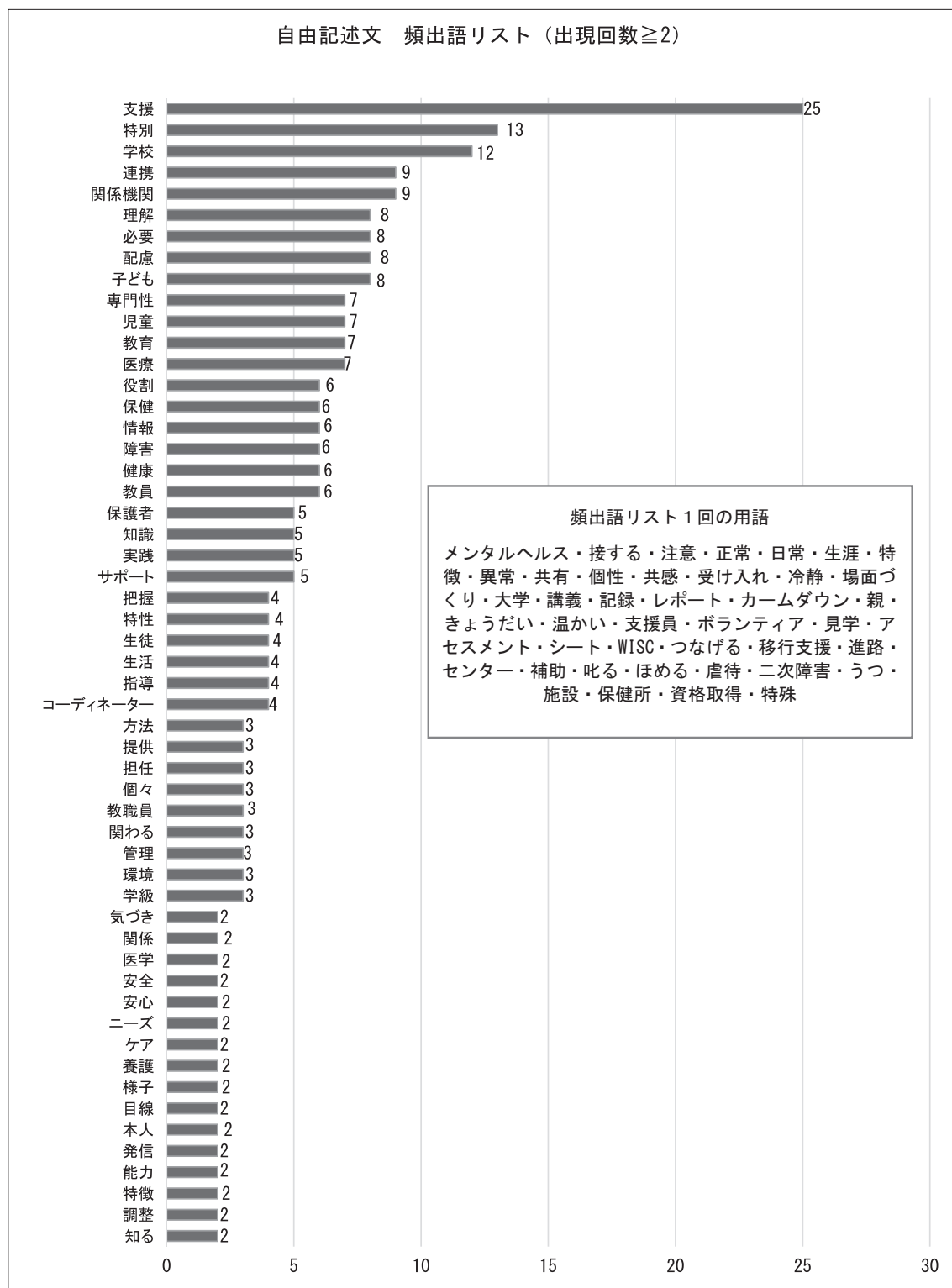


Fig. 7. 頻出語リスト結果

れており、養護教諭を目指している学生の質の高さや学びの蓄積がうかがわれる。

### (2) 共起ネットワークについて

共起ネットワークの結果からは、大きく①「教育支援・方法」、②「専門性」、③「ニーズ・情報提供」、④「コーディネート」、⑤「障害と向き合う」、⑥「生活・環境」、⑦「連携」、⑧「気づき」の8つのカテゴリーに分かれる結果となった。ここでは、強い共起関係ほど太い線で描画されており、例えば、「養護-教諭」「管理-能力」「送れる-安心-つ生活」「技術-方法-個々」「児童-生徒」「コーディネーター-役割」等がそれに相当する。また、出現数の多い語ほど大きな円で描画されており、語の出現数に応じて、それぞれの語 (node) を表す円のサイズが変わっている。

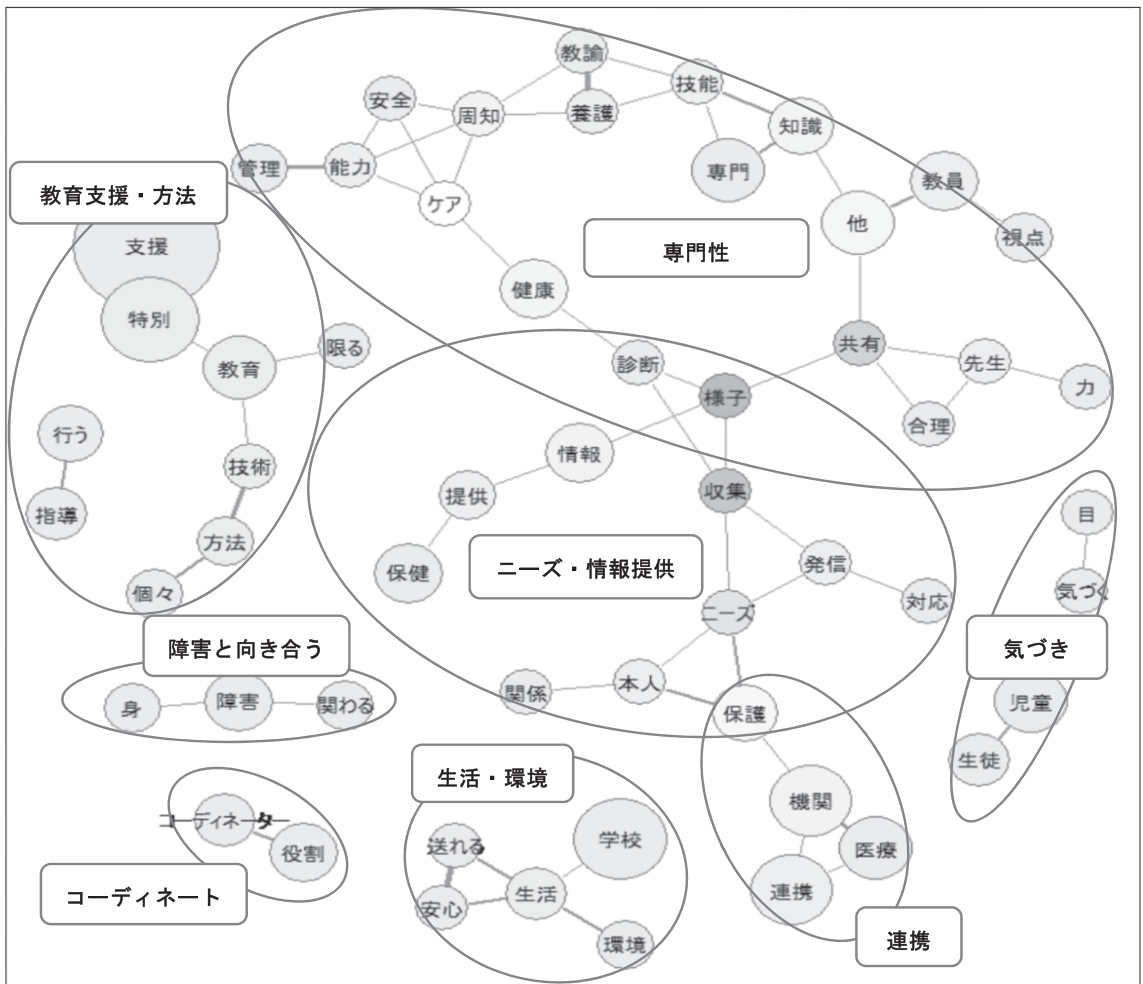


Fig. 8. 自由記述文共起ネットワーク結果

### (3) クラスタ分析について

クラスタ分析結果より内容を整理、統合すると、①「生活・安心」、②「ケア・健康・情報」、③「コーディネート」、④「子ども理解」、⑤「サポート」、⑥「専門性」、⑦「支援方法」、⑧「学びの環境調整」、⑨「気づき・受容」の9クラスタに分類された。前掲した共起ネットワークとの共通性が再確認できる

とともに、カテゴリーをより具体的な形で視覚化した結果として表示されている。

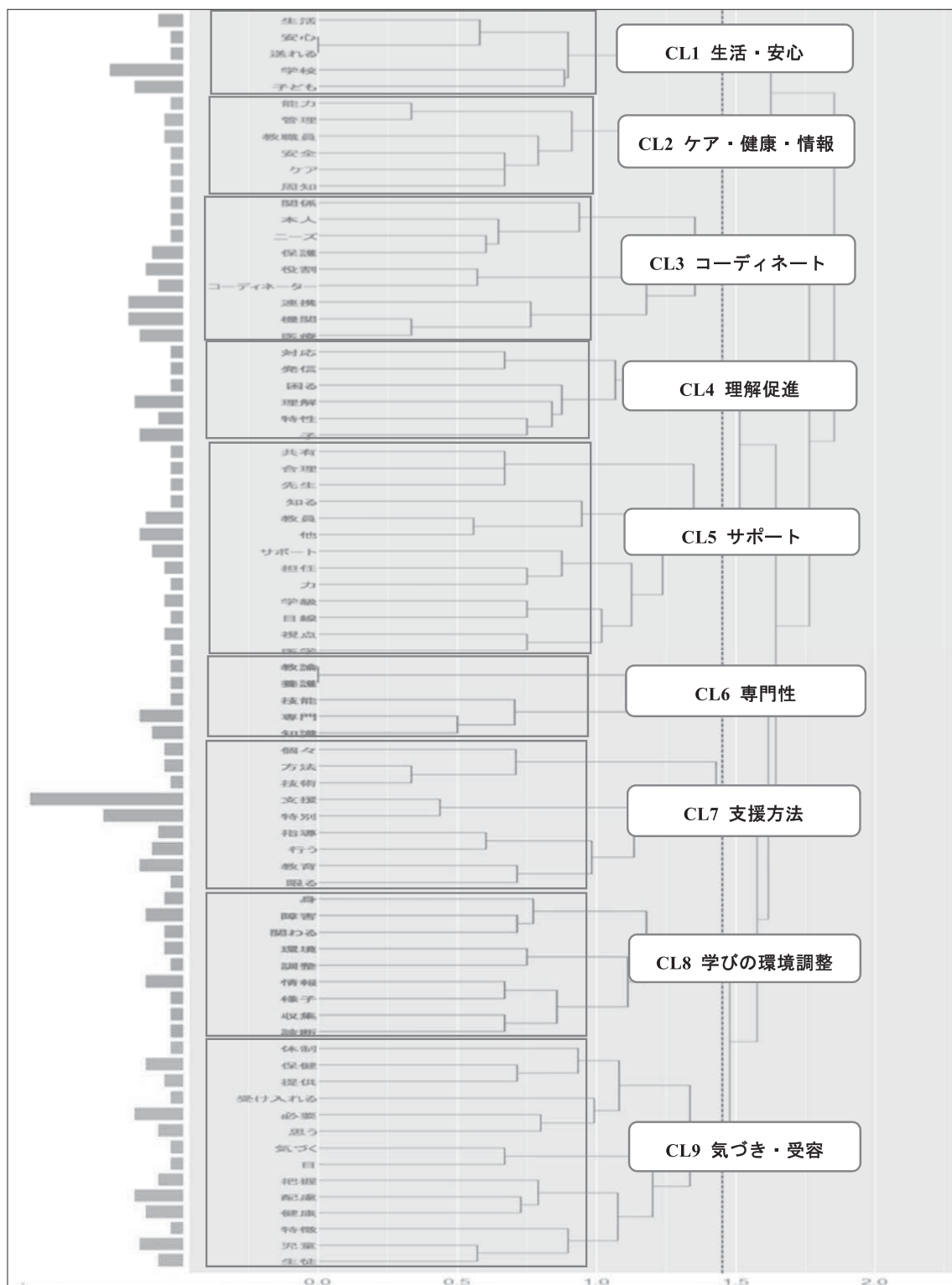


Fig. 9. 自由記述文クラスター分析結果 (デンドログラム, ward 法)

## CL1 生活・安心

児童生徒の特徴を見出し、どのような支援が必要なのかを把握することを意識するとともに、その子らしさ（プラス面）もたくさん見出しつつ、今、何に困っているのかを的確につかみとっていくことが子どもの生活を安定、安心したものに変えていくことができるということを重要視している。また、その子らしさを理解し、決して否定しない、障害を見るのではなく、目の前の子どもを理解して、その上で関わっていくことを大切にしている。

## CL2 ケア・健康・情報

定期健康診断における疾病や障害、来室時の状況、学校生活の様子、家庭環境等から特別支援教育に関わる情報を収集しやすい立場にあることを活かし、児童生徒の健康上での問題（メンタルケアも含む）の配慮をケースに即して実践し、さらに、子どもや保護者のニーズも収集し、必要に応じて教職員に発信していくことが重要視されている。

## CL3 コーディネート

養護教諭に求められているコーディネート力として、医療機関との連携、担任との連携、教職員と子どもの架け橋的な存在、教員・保護者・医療機関をつなぐ橋渡し役、合理的配慮を学校全体として共有していくための仲介的な役割等を持ち、子どもが充実した学校生活を送ることができるようなつなぎとしての立場を意識していることが想定される。

## CL4 健康理解・促進

児童生徒一人ひとりの身体的特徴を理解していくために、健康診断における配慮事項や必要な情報提供を行う必要性を感じている。さらに、保健指導を行う時に個々に応じた支援を加えながら、わかりやすく、丁寧に指導を行うことやバイタルサイン、医療的ケアの能力、健康課題の把握、安全管理、学校生活上の配慮を教職員に周知することを通して、積極的に特別支援教育へ参加していくべきだと考えられている。

## CL5 サポート

他の教員や生徒に対して正しい知識や特性を知ってもらうこととそのうえで配慮などをしていくことや一人ひとりの特性を理解し、その子にあった対応を周りに発信していくことが重視されている。また、障害のある児童生徒の健康情報（アレルギー、疾患など）を把握するとともに、自ら言葉で伝えることが困難な子どもたちへの「気づく」という配慮が必要であり、パニックや興奮を起こした時にクールダウンの場として保健室を提供する等の環境調整的なサポートも重要視されていることがうかがわれる。

## CL6 専門性

専門的知識をもって、他の教員とは、また違った視点でサポートすることや医学的見地からの支援や助言、学校内で特別支援の専門知識、技能を求められる職種だと考えられている。また、養護教諭は他の教職員よりも特別支援教育に関わる機会が多いので、より専門的な知識や技能を身につけておく必要性を感じている。心身の健康に対する細かいケアや児童生徒の障害を理解し、わかりやすく説明できる力を身につけること、看護学的視点から必要な支援をする等の専門性を活かした支援が求められている。

## CL7 支援方法

必要に応じて学習の遅れや問題行動が頻発する子どもへの補助支援や子どもたちの自己管理能力の育成、危機管理能力、個々の特性に合った保健教育等、個々の支援に対する対応の補助的な役割も求められていると感じている。

## CL8 学びの環境調整

安全性の確保や子どもが安心して学校生活を送れる空間づくり、保健室はどのようにあるべきかを知っておく必要性や子どもが元気に、落ち着いて学校生活を送れるように、養護教諭としての立場や視点から

学校環境を整えていくこと、居場所かつ教室としての保健室のあり方を重要視している。

#### CL9 気づき・受容

細やかな観察をして、小さな変化にも気づくことができるような目を持ち、その子自身を受け入れ、支えてあげることのできる心の広さ、あたたかさ等の人間力が必要であるとともに、特別な支援を必要としている子どもをまずは養護教諭がしっかりと受け入れ、受け止めていくことが役割であると考えられている。

### 4 総合考察

養護教諭を目指す大学生の「特別支援教育」に関する問題意識を明らかにしていくことを目的として調査を行い、ここで得られたデータを分析した。その結果、学生たちは、より専門的な知識と技能の修得を望んでいた。一方、課題としては、自身の専門性における力量不足や経験の少なさ、障害のある子どもたちとのコミュニケーションの回り方等、実際に関わる場面の不安要因が数多くあることが確認された。

養護教諭として学びたい「特別支援教育」に関する内容や「特別支援教育」と関わっていく上での問題意識・課題意識、「養護教諭」に必要とされている（求められている）「特別支援教育」に対する役割について、特別支援教育や障害に関する基本的な知識・技能を修得していくことはもちろんのこと、「学校内の関係者や障害児学級との連絡調整」「地域における関係機関との連絡調整」「学級担任への学習集団づくりを含む支援、専門家チームや巡回相談員との連携」「校内委員会での推進役」「特別なニーズを抱える子の記録保持、特別支援学校との連絡調整」「個別の教育支援計画の作成」「進学先校への引き継ぎ」「障害児の個人情報保護管理」「学習サポーターやボランティア等の支援」「保護者に対する相談窓口としての役割や教育相談の実施計画の立案と実施」等、内容は多岐にわたっていた。

特に、コーディネート力や関係機関との連絡調整や相談窓口等、養護教諭としての役割意識や課題も明確に意識されており、上記のような実践力をつけていくためにも、特別支援教育に関する専門性や技術力の向上が目指されている。

また、学生が意識している特別支援教育に関わる問題や課題については、「障害に関する知識が不十分であり、仕事量も多いので、支援の必要な児童生徒と十分に関わる時間がないのではないか」「研修会など特別支援教育について学習する機会も少ない」「学校内の支援チームが十分に機能していないと支援が成り立たない」「担任との連携をどのようにとっていけばよいのか」「特別支援教育コーディネーターとしてやっていくことができるか」「スクールカウンセラー等、専門家との連携の回り方や保護者への理解や協力を得る手立て、医療機関との連携が難しいのではないか」等の意見が浮上していた。

このような課題を解決していくためにも、まずは、養護教諭自身が自ら学び、行動を起こし、実践力を地道につけていくことの必要性が求められている。具体的には、「児童生徒の話をじっくりと聞く姿勢を保つ」ことや「障害に関する情報提供」「他の教員との連絡調整」「参考になる文献や資料、データの紹介」「学校内での支援方法を考える機会（ケース会議）の設定」「専門機関に関する情報提供」「保健室でできる支援等の話し合い」「医療機関や各関係機関への情報提供」「保護者との教育・発達相談の重視」「T・Tとしての授業参加」等、積極的解決策に向けた意識づけも図られていることが明らかとなった。

本稿では、将来、養護教諭を目指している大学生の「特別支援教育」に関する問題意識を探索的に明らかにしていくことを目的として、得られたデータをもとに分析、考察を試みてきた。結果として、特別支援教育に関する基本的知識や技能、現場で即時的に対応できるような支援方法や手立て、心理的側面を中心とした心身のケア、児童生徒はもとより、教職員、保護者への理解促進などを行いながら、学校や各関

係機関との調和やコーディネート的な役割まで、従来の養護教諭としての役割を超えた専門的、実践的力が求められていることを十分に認識していることが明らかとなった。

橋弥・竹下・平井・梶村ら（2015）も言及しているように、養護教諭の専門性が問われる現在、教育・看護実践能力を身につけていく場としての臨床実習や保健実習は日々の学びを再確認、再検討していくための重要な学修機会であると考えられる。それに加えて、特別支援教育の重要性も求められる中、より幅広く、多様性を踏まえた専門性の修得や現場と直接に関わっていく経験が必要となってくるだろう。特別支援教育の学びの場においても、インクルーシブ教育システムの構築を検討した都築ら（2014）の問題提起は、養護教諭養成における特別支援教育の必要性や方向性が具体的に示されており、学びの環境改善はもちろんのこと、カリキュラム編成や科目履修、臨床・保健実習等をトータル的に含めたかたちで今後も検討していく必要がある。そのためにも、養護教諭養成を含めた教員養成現場において、学生の学修意欲とニーズに応えながら、出来る限り、学びの提供と質保証、専門性を高めていくための手立てや機会を構築していかななくてはならない。

## 謝 辞

今回、「教職実践演習」で特別支援教育を学ぶ学生の皆様に、貴重な時間をいただき調査を実施させていただいたことに感謝申し上げます。また、養護教諭の役割と特別支援教育との関わりについてアドバイスをいただいた先生方のご示唆にも深く敬意を表します。

## 引用文献

- 橋弥あかね・竹下裕子・平井美幸・梶原郁子（2015）：養護教諭養成課程における臨床実習の感想文の内容分析，大阪教育大学紀要，第Ⅲ部門，63(2)，31-38.
- 林幸範・石橋祐子・小杉幹子・今林俊一・林廣徳（2013）：特別支援教育に関する研究（2）－養護教諭が認識する特別支援教育の役割－，こども教育宝仙大学紀要，4，11-24.
- 樋口耕一（2014）：「社会調査のための計量テキスト分析」，ナカニシヤ出版.
- 本田優子・松葉佳子・酒見さやか・米村健一（2005）：特別支援教育を必要とする児童の実態と支援に関する事例研究，熊本大学教育学部紀要，自然科学，54，43-52.
- いとうたけひこ（2013）：テキストマイニング看護研究における活用，看護研究，Vol.46，No.5，475-484.
- 小林磨由子・竹下誠一郎（2009）：養護教諭の特別支援教育へのかかわりについて－養護教諭が行う支援の現状と課題－，茨城大学教育学部紀要，教育科学，58，237-245.
- 関根夢・大庭重治（2015）：特別支援教育における養護教諭の位置づけに関する現状と諸課題，上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要，21，5-9.
- 白石晴香・水野智美（2012）：発達障害児への支援における養護教諭の認識と研究ニーズ，障害理解研究，14，35-42.
- 竹鼻ゆかり・朝倉隆司・渡邊正樹・佐見由紀子・五十嵐由美・塚越潤・丸太文子・五十嵐靖子・遠藤真紀子・大関智子・小熊三重子・小野優佳・酒井順子・佐藤牧子・高橋衣純・中谷千恵子（2010）：養護実習における学生と養護教諭の学びの検討，東京学芸大学，芸術・スポーツ科学系，62，55-61.
- 都築繁幸・大島光代・山田丈美・名倉一美・原都水・山下玲香（2014）：インクルーシブ教育システム構築に向けての教員養成の在り方に関する一考察，障害者教育・福祉学研究，10，63-74.
- 全国養護教諭連絡協議会（2014）：平成26年度養護教諭に職務に関する調査報告書.

## 参考文献

- Bauer, M.W (2000): "Classical Content Analysis," M.W. Bauer & G. Gaskel, eds., *Qualitative Researching with Text, Image and Sound*, London: Sage, 131-151.
- 中央教育審議会初等中等教育分科会報告（2012）：共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進.

- 江頭典江・堀薫夫(2008)：看護学生の学習への意識に関する調査研究－成人学生と一般学生の対比－，大阪教育大学紀要，第IV部門，56(2)，159-173.
- 藤田和也(1999)：「養護教諭の教育実践の地平」，東山書房.
- Glaser, B.G & A.L. Strauss (1967): *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago, IL: Aldine. (=後藤・大出・水野 [訳]「データ対話型理論の発見－調査からいかに理論をうみだすか」，新曜社.
- 堀内久美子・福田博美(2000)：養護実習における総合学習の記録を大学での学習に生かす試み，愛知教育大学養護教育講座研究紀要，5(1)，13-20.
- 石崎トモイ(2006)：知的障害養護学校における担任教諭と養護教諭の健康管理意識の相違に関する研究(第3報)，新潟青陵大学紀要，6，33-41.
- Lonkila, M (1995): "Grounded Theory as an Emerging Paradigm for Computer-Assisted Qualitative Data Analysis," U. Kelle, ed, *Computer-Aided Qualitative Analysis*, London: Sage, 41-51.
- 中桐佐智子・土井さや・門田美千代(2004)：学生の実習直後の自己評価と指導者評価の検討，*International Nursing Care Research*, 3(1), 1-10.
- 中西睦子(1993)：「臨床教育論－体験からことばへ」，ゆみる出版.
- 鈴木裕子(2009)：養護教諭が特別支援教育コーディネーターの役割を担うにあたって，*健康教育*，60(2)，15-19.
- 高岳雅・大谷尚子(1999)：学生の養護教諭指向と達成感に関する研究－臨地実習の意義と学生指導のあり方を考える－，*日本養護教諭教育学会誌*，2(1)，67-77.
- 高橋あつ子(2004)：軽度発達障害児への学校現場での支援と対応－学校コンサルテーションの立場から－，*学校保健研究*，46(5)，486-491.